審査の結果の要旨

氏　名　　河野　俊寛

書字は、ワープロが普及した現代においても、学校教育の中で重視されている技術である。ところが、その重要な技術を人一倍努力しても充分に獲得できない書字障害という障害がある。しかし、書字障害の研究報告は少ない。特に日本においては、書字障害を評価する標準化された検査がほとんどないこともあって、研究は進んでいない。

このような日本の状況の中で、書字障害研究をスタートするにあたって、書字障害評価検査作成は緊急の課題である。とはいえ、検査作成に必要な基礎データ、特に書字障害の支援の対象になる小学生の書字に関するデータは皆無に等しい。

そこで、本研究の目的は、小学生の書字の発達について実験的に明らかにし、書字障害スクリーニング検査開発に向けて具体的な提言を行うことである。本研究の特徴は金沢市内の 5000 人以上の小学生男女を対象に実験的研究を行ったところにあり、これほど大規模なデータを収拾した研究はわが国初のとりくみである。

論文の構成の概要は次のとおりである。

第 1 章は序論として、研究の背景、書字に関する内外の先行研究、書字障害の理論、研究の蓄積がある成人の失書研究、症例報告の中の書字障害評価の実態について概観し、そのうえで、本研究の意義と目的を述べた。

第 2 章では、小学生の視写 (copy) における書字の発達について検討した。その結果、書字速度は学年が進むにつれて直線的に増加し、男女差が認められた。誤りについては、視写ではそもそも誤りが少なく、視写だけでは誤りの分析には不充分であることが明らかになった。

第 3 章では、小学生の聴写（dictation）における書字の発達について検討した。その結果、書字速度については、第 2 章の視写と同様、学年進行ともに直線的な発達が認められ、男女差があった。誤りの発達は、有意味単語課題と無意味単語課題とでは異なっており、書字に関係する様々な要素の発達の関与が示唆された。特殊音節の誤りが明確で、男女差があった。

第 4 章では、視写と聴写というモダリティ別の比較を行った。書字速度は聴写の場合の方が有意に速かった。特殊音節の誤りの比較では、視写では 2 年生以降ではほとんど認められないため、評価項目にしにくいが、聴写では 5 年生まで直線的に減少していたので、特殊音節の誤り検出のためには、聴写課題を行う必要があることが明らかになった。

第 5 章では、書字障害の症例を 2 例考察した。2 例とも各種の検査によってその実態を把握したうえで支援技術（assistive technology、 AT）を活用した支援を行った。

標準化された書字評価検査がないために、多くの検査を行う必要があった。書字速度の評価を行うことによって、それぞれの症例の障害原因が推定できた。2症例の検討から、作成する書字検査では、課題に無意味文・単語を含めること、課題の提示は配布と掲示の両方を実施すること、及び、視写・聴写の両モダリティで実施することの必要性が明らかになった。また、ATを活用した支援が有効であることも明らかになった。

第6章では、第2章、第3章、第4章、第5章の結果である書字の発達について考察を加え、そのうえで日本語書字障害スクリーニング検査作成時に考慮すべき観点を具体的に提案した。

第7章では、総括として、研究のまとめを行い、今後の課題として、判読性（legibility）の研究、書字評価検査作成、及び、AT（支援技術）を活用した支援研究をあげ、今後の展望としては、書字そのものの研究の必要性を述べた。

審査の結果、本研究は日本語の書字障害をめぐる問題のみならず、日本の小学生の書字能力の発達全般の研究にとっても非常に重要な基礎的知見を提供した研究であり、今後の展開も期待される有益な研究成果であると認められるため、学位授与に相当するという合意がなされた。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。